

トイレの共用化 ～性の歴史から考える～

A16LA030 岡本理子

日本における混浴の歴史

- 日本では昔から、全国各地で公衆浴場での混浴が行われていて、老若男女同じ湯に浸かるのが当たり前であった。当時の日本人にとって裸は顔の延長のようなもので、裸体をさらすことに何の恥じらいも抵抗もなかった。
- しかし、1853年のペリー来航により入浴の風俗が劇的に変化する。来日した外国人たちは日本の混浴風景を見て驚愕し、男女が裸を見せ合うとは日本人は下品だと猛烈に批判する。なぜなら、西洋では裸体はセックスを想起させるものという考え方だったからだ。（西洋的なハダカ観）
- 政府は、外国から軽蔑されたくないという一心で混浴を根絶させようと必死になる。1872年には道式詰違条例を出し、混浴、裸体、肌脱ぎでの通行、市中の便所以外の場所での立ち小便などが禁止される。
- また、混浴を訪れた外国人たちは、日本人女性の裸に好奇の目を向けるようになる。不快に思った日本人女性は裸体を隠し始める。その結果、隠されると性的魅力が高まり、男性は性的なものとして女性の裸を見たくなるようになった。（西洋的なハダカ観）筆者は、裸を隠す社会こそ性犯罪の原因だと述べる。

共用トイレと性犯罪

- 昔の日本人にとって裸はオープンなものであり、性的魅力も感じられていなかった。しかし今は、裸は隠され、裸は性的な対象となっている。
- これをトイレの問題にあてはめて考える。昔の日本では、風呂だけではなくトイレも男女共用のところが多かった。男女別にするようになったのは、これも西洋的なハダカ観によるものと思われる。
- 男女のトイレを別々にし、女性のトイレを男性には見えないように隠すことにより、男性には女性が性的なものとして映る（もちろん逆も言える）。トイレの男女共用化に反対の意見に「男女共用にすると性犯罪が増える恐れがある」という意見が多いが、むしろ、共用化した方が性的な対象とはなりにくいのではなかろうか。

まとめ

- LGBTなど性的マイノリティの人が快適に使えるためには個室共用の個室トイレにするのがベストだが、性犯罪が増える恐れもあるので難しい、せめて「たれでもトイレ」を増やすべきだと考えていた。
- しかし、混浴の歴史について調べると、性別を分けるからこそ性の違いが意識され性的魅力を感じてしまうようになったのたどたどわかった。
- そこで、個室共用の個室トイレにし、風呂も男女兼用の風呂を増やすべきだと考えている。LGBTの人にとって使いやすくなるだけではなく、裸への性的欲望も減り性犯罪も減るのではないかと。
- 実際、近年ドイツ・オーストリアではサウナの混浴復活の動きがある。

参考文献

- 下川歌史（2013）『混浴と日本史』筑摩書房。
- 中野明（2010）『裸はいつから恥ずかしくなったかー日本人の羞恥心』新潮社。